

### 3.11 を前に、“ふるさと” 宮城県亙理郡山元町を訪れて感じたこと

この2月に、父親の一周忌で、宮城県と福島県の県境にあります山元町へ帰省してきました。

実家は江戸時代から続く旅館業を営んでおり、まだ宿場と呼ばれていた頃から続いていましたが、町の都市再生計画もあり200年近い旅館の歴史に幕を閉じる事となりました。

これも原発事故に伴い、福島方面からの交通の分断に、リピーター客の減少と、津波を被った土地であること、旅館の醍醐味である料理や景観など全てにおいて宿泊者の安心安全が担保出来ないと判断しての事でした。父親も最後まで再建を望んでましたが、最後は力尽きさぞかし無念だった事と思います。

地震津波などの災害は無いに越したことはないですが、それだけならばまだ再建の道もあったのですが…。

旅館の備品整理しながらせめて旅館や親の形見の一つでもと思いましたが、ここは福一から直線距離で50キロほどで、飯館村もふた山越えたところに位置します。思い出の品を一つ一つ手にはして持ち帰ろうと思うのですが、放射能がついてたりするのではないだろうか？と、年中の息子の顔を思い浮かべてはなんとも言えない悔しさと虚しさに泣きながら手に取っては戻す行為を繰り返しました。

帰る前日、兄が福一を近くで見ておいた方がいいという事で、事故後初めて富岡町の先まで行って来ました。

避難区域の小高町では住民が誰も住んでおらず、テレビとかでは理解していたつもりでしたが、人の息吹きを感じず異常で異様な光景が広がっていました。

知り合いの小高町の手芸店も原発事故と避難で商売が成り立たず、明日取り壊しとなり、奥さまが悔しさを滲ませていました。ご主人はGSも営んでいて、ガソリンがないと住民が困ると使命感を持って日々頑張られてたのですが、両ひざに水が溜まる病になり、現在も毎日水抜きで管付きの足で病院へ通っています。GSなので当然洗車機もあるのですが、その汚泥線量はとんでもない数値だと聞かされました。それでも町の起点となって欲しいとの思いから続けていられますが、ご主人の身体が心配でなりません。

駅の看板には町の歴史や祭事や観光地が掲げられていましたが、今では虚しさを助長する物の一つでしかありません。

改めて、ひとたび原発事故が起きてしまったら、住民はもとより町の息の根が止められてしまうのだなど。

国の避難解除にも、6年も放置し手入れもできず汚れ傷んだ建物に戻れという言葉には無理がありすぎます。

102歳の方も将来に悲観して首吊り自殺をされました。

九電の方々には、是非マスク無しでこの近くまで来て現実を見ていただきたい。  
再稼働している原発や玄海原発再稼働の議論など問題外で、話すまでもありません。

先々月に震災の体験談を福岡の高校生の前で話す機会があり、数日後に感想文を頂いたのですが、その半数近くが「なんとなく怖かった」「大変だったのを覚えてる」といったものでした。震災や原発事故が漠然とした記憶でしかなく、約6年の歳月というものは事故への関心も恐怖も薄れさせてしまうという危機感に、逆にこれから微力ながらも真実を話し伝え続けていく事に力を入れていかなければと思いました。

今は福岡県に避難し身を寄せていて感じるのが、九州や福岡は、羨ましいくらい海の幸や山の幸が豊かで、情熱あふれる人間性と豊かな自然が調和していて、世界にも誇れる都市だということです。

だからこそこの地域を、今の子供達やこれから産まれてくる子供達に、綺麗なままバトンを渡すのが我々の使命ではないでしょうか。

(文責 斎藤直志：九州避難者訴訟原告)



小高町の国道沿いに渦高く積み  
まれた汚染バックです。  
国はここを避難解除しようと  
しています。



小高駅です。折り返し運転が行われています。



知り合いの小高町の手芸店の内部。  
震災・原発事故から6年たち、  
私が訪れた翌日に取り壊されました。





付近にはあちこちモニタリングポストが。  
果たしてこの数値すら信じていいのかわか。



福一付近の道路は国道以外は全て封鎖されています。  
車を停めて撮影しようものなら白バイとパトカーに囲まれます。  
ジャーナリストなどに撮影されると都合悪いんでしょう。

新しい家や古い家。  
全て空き家です。

